ドラゴンと私

エール・クリストファ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ドラゴンと私

【Ｎコード】
Ｎ７６４０Ｖ

【作者名】
エール・クリストファ

【あらすじ】
私、貧乏くじを引きました。飛ばされた先が、よりにもよって最悪な異世界。ゴツゴツした岩しかないし、空気は腐臭で吸い込むたびに気持ちが悪くなる。現れたドラゴンも、とんでもないほど乱暴で、気付くと傷だらけ、痣だらけ、血だらけです。召還された途端に瀕死の状態って、こんなのありですか？　※設定からするとあまりやらしい話にはならない筈なんですが、美青年のエロいシーンを描きたがる筆者の性質を鑑みて、Ｒ１５指定にしておきます。

第1話　貧乏くじ

異世界というものは、まじめにキツイ。

いやきっと、異世界にもいろいろあって
なのに私が間抜けにも
一番最悪な貧乏くじを引いてしまったんだ。
間違いなく。

だっていきなり生臭いどろどろの中で
溺れそうになって、もがいてます。

髪も顔も、全身が泥だらけ。
いわゆる泥沼の中だから（人間関係とかでなく）
どこをつかんでも、ぬるぬるで浮上できません！

何でいきなりこうなんですか？
私なにかしましたか？

このままだと、即死なんですけと
それだとわざわざ私を召喚した意味なくないですか？

そろそろ体力の限界。どーすんの？

と思ったら、良かった良かった。
何か大きなものがザブンと私をすくい上げた。

そうでしょ、そうでしょ、
やっぱり助けるでしょ。

なんてほっとしたのは、束の間。

そのすくい上げ方が乱暴すぎる！
ぶんっと振り回されて、目が回りそうになったところで
トゲトゲの岩の上へガツンと投げ出された。

いたたた、痛い！　痛いじゃないの！
何ヵ所も擦り傷と痣が、できたっぽいよ。

顔の泥を必死で拭って、目を開ける。
う～ん、黒い岩のゴツゴツしか見えません。

口の中の泥をペッペッと吐き出して
空気を吸い込んだけど、その空気が臭い。
腐臭よ、腐臭！　臭すぎる！

吸い込めば吸い込むほど、胸が気持ち悪くなって
体まで重くなる。
うわ～ん、こんなんじゃ、生きてくのもやっとじゃない！

パニクっていると、ザララ、シュウシュウと
耳障りな音まで聞こえてきた。

泥で重くなった瞼を必死に開いて、視線を上げたら
そこには大きくて迫力満点のドラゴンが鎮座していた。

ギョッと凝視する私に向かって、金属のようなウロコをガラガラ鳴らし
恐ろしい顔をゆっくり近付けてくる。

全身を覆うウロコは青みがかった銀色で、お腹の部分は真珠色。
凄みのある顔の中のふたつの瞳は空のように透き通る青で
なんだか禍々しい割に、美しいじゃない。

泥だらけの私が、ちっぽけで汚い虫みたいに思えてきて
なんだかとっても悔しいわ！

なんて考えていたら
次は冷たい水が大量に、ビシャッと襲いかかってきた。

だから扱いが、荒すぎる！
これじゃ、助けられた気がしない！

まあでもお陰で、泥は綺麗に流れたみたい。

改めて自分の姿を見下ろすと
色のない薄いワンピースを一枚着ているだけ。
ずぶ濡れのせいで透けてぴったり肌に張り付いている。

本来なら恥ずかしい姿なんだけと
目の前にいるのはドラゴンだからなぁ。
恥ずかしがっても、仕方ないか…。

ザララと音がして、大きな爪が私の腕を引っ掻け
上に引っ張りあげる。

「いたたたた！」

爪の先がまるで鋭利な刃物のように尖っていて
肌に食い込み、血が…血が…！

わ～ん、さわんないで！

「お前、この世界のモノではないな」

おおお、しゃべった。

低く、くぐもった声が地響きみたいに、地面を震わせている。

「サハラ、あやつ本当に召喚したのか」

ちっ！と舌打ち。

そしてガラガラ体を起こし、大きな手で私の体を掴もうとしてる。

そこにさっきの爪がニョキニョキいっぱい生えている！

やだやだ！触んないで～と暴れたら

逆に爪に当たってしまい、腕に何ヵ所も切り傷が…

あっという間に私、血だらけよ！

「なんだお前、オレが触っただけで死にそうだな」

そ、そうよ、そうよ。

それにさっきから空気が悪くて

頭もガンガンしてきてるのよ。

「顔色も悪い。瘴気にやられたのか。

こんなに弱い生き物は初めて見たぞ」

もしかして、人間を知らないの？

ドラゴンの顔が更に近付き
珍しそうにじぃっと覗きこんでくる。

ちょ、ちょっと。まさか私を食べる気じゃないでしょうね。
ドラゴンって肉食ですか？
てゆーか、人間は雑食ですから、美味しくないですよ。
食べないで、食べないで、食べないで…！

ぶるぶるぶるぶる…
恐怖で全身が震え出す。

それを見てドラゴンが、どこからともなく布を引っ張り出してぐるりと私を包み込み、爪でお弁当のようにぶら下げた。

「ほっておいたら、すぐに死にそうだ。
仕方ないからまずはサハラのところへ行ってみよう」

バサッという羽の音と共に、激しい風が巻き起こる。
そしてグオォォ！と体が舞い上がり
その勢いの凄まじさに、私は気絶してしまった…

取り扱い注意のシールください！

第2話　初めての…

ドカン！という激しい衝撃で
否応なしに意識が引き戻される。

ゴツゴツした岩の上に落とされて
背中全体に痛みが走る。

思わずグエッと蛙みたいな声を洩らした。
背骨が折れたかと思ったよ！

私をくるんでいた布が剥ぎ取られて
ゴロンと地面に転がった。

もう力が入らないよ～。

それでもなんとか薄目を開けて見上げると
こちらを覗きこむドラゴンがもう一匹増えていた。

さっきの銀色のドラゴンが右側。
エメラルドグリーンのドラゴンが左側。

「今にも死にそうだ…」

「そうなんだ。
なんだかやたらと弱くてな、触ることもできん」

「まずいですよ。召喚したのにすぐ死なせてしまっては
契約の神の怒りを買ってしまう」

「じゃあ、どうすれはいいのだ？」

エメラルドのドラゴンの爪が近付いてきて
恐ろしさに体がガタガタ震え出す。

「だめだ、だめだ。だから、さ・わ・れ・な・い・と言っただろ」

「それでは何も出来ないではないですか」

む～んと、ドラゴン同士で頭を付き合わせ
ボソボソと小声で相談を始める。

寒いし、痛いし、苦しいので、
なんでもいいから早くしてほしいなぁ。

「よし、では試してみましょう」

エメラルドのドラゴンが、ガラガラ音を立てて身をおこし
ドォォッと風を起こしながら空へ舞い上がった。

また吹き飛ばされる！と身構えたけど
よく見ると銀のドラゴンが、私の上に覆い被さって
風を避けてくれていた。

あら、ちゃんと気遣いできるんじゃない…。

風が止むと、ザララと音をさせて銀のドラゴンが動き
再び心配そうに私の顔を覗きこんできた。

大丈夫と言ってあげたいところだけど
切り傷と打ち身で全身が痛かったし
嫌な臭いの空気のせいで、胸も苦しくなるばかり。

このままじゃ、本当に死んじゃうかもよ？

するとそれほど時間がたたないうちに
エメラルドのドラゴンが舞い戻ってきた。

「エルフから『変わり玉』をもらってきました。
これを娘の髪と一緒に飲み込めば
娘の種族と同じ姿に変身する能力が得られます。」

「よし、では早速！」

銀のドラゴンが手を伸ばすと
エメラルドのドラゴンがそれをバシンと打ち払った。

「なんだ、なんだ。
お前は私のためにあれを召喚したのだろう。
あれに触れるのは私で良いではないか」

「私には召喚した者として
あれを守る義務があります」

「守るだけなら姿を変える必要はないではないか。
私は、私のもとに降ってきたあのやわらかいモノに
触れてみたいのだ」

「わ、私だって、自分が召喚したのが

どんなものなのか、触れて確かめてみたい！」
あれとか、モノとか
まったく人を何だと思ってんの！
てゆーか、体がしんどいんだから、早くしてー！
結局二匹のドラゴン（だんだん言い方が雑）が
もめにもめて出した答えは
エルフから『変わり玉』をもうひとつもらってきて
どちらも飲むということだった。
そうと決まれば彼らの行動は素早くて
さっさと二つめの『変わり玉』を手に入れてくる。
そして鋭い爪の先端で、スパッと私の髪を一房切り取り
ドラゴンたちはそれを分けあって
『変わり玉』と一緒に大きな口にほおり込んだ。
二本の竜巻が沸き起こり、大きなドラゴンの影が飲み込まれる。
やがてしばらくするとそこに、二人の『人間』の姿が現れた。
一人は青みがかった銀色の髪を背中で束ね
額に青い石がはめこまれた金色のサークレットを輝かせている。
短めの白いローブを着て、腕と脚に銀色の甲冑、
背中には真珠色のマント、
スラリと長い脚に沿って大きな剣を下げている。
高い鼻筋、引き締まった頬。

切れ長の目にはスカイブルーの瞳が輝き
涼やかな口元を凛々しく引き結ぶ姿は
まさに物語の中の戦士だった。

そしてもう一人。
金色のウェーブがかった短髪の下に
緑の石のはめこまれたサークレットをし
緑色の短いローブと、長いマントを身に付けている。

腕と脚には同じように金色の甲冑。
腰のベルトにも大きな剣が刺さっている。

顔立ちはこちらも鼻筋が高く、少し垂れた目尻に
エメラルドの瞳が輝いている。
バランス良く引き締まった頬と顎。
言ってみれば、女たらしの戦士といった風情。

ドラゴンな時も二匹ともそうだったけど
なんだか凛々しくて美しいわ。

それって本質の部分をちゃんの反映した姿だって
思っていて大丈夫なのかしら？

二人は自分たちの姿を隅々まで観察して
目線が低いだの、空が翔べないだの、剣が便利そうだのと
一通り感想を述べてから
やっと私のことを思い出し、ザクザク歩み寄ってくる。

そして両側に跪き、その綺麗な顔でじいっと覗きこんできた。

四つの手がゆっくり近付き
恐る恐る髪や頬に触れる。

そのまま肩や腕に降りてきて
あろうことか胸にも念入りに触り
更にお尻と太股にも時間をかけて触りまくった。
３Ｐの恥辱プレイか！？

私は恥ずかしさを通り越して
怒りで頭がどうにかなりそうだったけど
ここに来てからの臭い空気のせいで、苦しくて苦しくて…
息をするのがやっとで、声も出せず
ぐったりとそれを受け入れるしかなかった。

え～い、ちくしょう。
後で覚えてろよ！

やがて二人はその手を離した。
どちらも頬を上気させ、ワナワナと震えている。

「な、なんてやわらかいんだ…！」

「ああ、こんなにやわらかいもの、初めて触った」

そして再び触ろうと手を伸ばしてくる。

こら！いい加減にしろ！

「よ、よし。ディオスはまず

これの瘴気を抜き取って下さい。
その後、私は知識を吸い取ります」

うん、と頷いて銀色の戦士の方が顔を近付けてくる。

な、なに？今度は何する気？

指一本動かせない私に彼は覆い被さって
ちゅう～っと口付けてきた。

う、うわわ～！

いきなり唇を割ってディープキス！

嫌だ嫌だと思ったけれど、
だんだんに胸の重苦しさが薄らいでくるのが感じられた。
口の中を動く柔らかいものが、私の中の毒を吸い上げてくれている。
最後は思わず舌を絡ませて、私から求めちゃったよ。恥ずかしい！

するとガバッと騎士が体を離して
少し離れたところに膝をつき
荒い息で肩を上下させた。

「た、たまらん。なんだこの感触は」

あ～あ、もう終わり？
私の中の瘴気、まだ残ってるよ。

「よし、では次にこれの中の知識を少し吸い取りましょう」

今度は金髪の男の方が、ぐらりと唇を近付けてきた。
こちらもやっぱりディープキス。

本当は軽いフレンチキスから始めるもんなんだよ、って
今度ちゃんと教えてやらなくちゃ。

そんなことを考えている一方で、今度は頭の中から
何やらシュルシュル抜き取られる感覚がある。

何してるのかな～と思いながら
またまた思わず舌を絡ませて求めちゃったりする。
わ～ん、わたしのエッチ～！

すると金髪の彼もガバッと体を離し
ワナワナ両手をついてしゃがみこんだ。

あら、そんなに刺激が強かったかしらん？

二人は完全に腰砕け。

私は胸がだいぶ楽になったけど
まだ全身の痛みで動けない。

ん？ちょっと。これじゃあ全然、解決できてない！

早くなんとかしやがれい！

第2話　初めての…（後書き）

ドラゴンはめちゃめちゃ、ウブでした。

第3話　難題は山積み

いつの間にか、眠っていたらしい。
ぼんやり目を覚ました私の耳には
パチパチ、穏やかに火が燃える音が聞こえた。

「とにかくこの世界とは違いすぎる。
あれが暮らしていた景色、空気、食べ物、生活。
全てが違っていて…
ここで生き延びることは、かなり難しいと思われます」

パチパチと燃えているのは、焚き火ではなく、黒い玉だった。
いったいどういう仕組みでそこに火が保たれるのか、まったく分からない。
ああ本当に、この世界は何もかもが違うのだな、と思った。
ただ伝わってくる温かさだけは、同じだった。

炎の向こうで、綺麗な顔立ちの青年が二人
座って言葉を交わしていた。

「しかし、この死にかけた世界を再生するためには
あれが必要なのだろう。
そのためにお前が召還したのだから」

「はい」

「あれを生き延びさせることによって、その先に
何か新しい道が拓けるのかもしれない」

二人の声を聞きながら、徐々に意識がはっきりしてくる。
体の上にかけられている布。
ドラゴンが私を運ぶ時に使っていたものだ。
目を凝らしてよく見てみると、それは布ではなく
何か動物の皮だった。

表面がテカテカ光っていて、細かい溝が入っている。
は虫類系だあぁぁ…　ひえぇぇぇ…

思わずゴソッと動くと、二人が気付いて振り向いた。

「おお、目覚めたか」

何かを手に持って、ザクザク歩み寄ってくる。

「これは植物の実を搾って、作った飲み物だ。
　とりあえず飲んでみろ」

銀色の青年の方が、私の背中に腕を回して体を起こすと
木の実の殻に入った黄色い液体を、口に近づけてきた。

さわやかな柑橘系の香りが漂って、空気の臭さを払ってくれる。
これなら飲めるかも、と口の中に流し込む。

ちょっと酸っぱいけど、その刺激が重い体には心地よかった。

「あ、ありがと…」

か細く声を絞り出すと、銀色の青年は驚いて目を見開いた。

「し、しゃべったぞ！」

これだけ違う世界でありながら、言葉だけは通じるのが助かる。
さすがにどこかの神様も、これくらいの救いがなくては
生き延びるのは完全アウトと思ったのだろう、多分。

「良かった、口に合ったようですね。
　では次に痛めた背中へ薬を塗りますので、服を脱いでもらいましょう」

「ちょっと、ちょっと、ちょっと！待ってください…」

私の服をひっぺがそうと、裾に手をかけた金髪の青年に
必死の視線を投げる。

「勝手に脱がさないでください」

「しかし、背中が痛むでしょう。
　あなたの世界の知識を参考に、効きそうな草を集めて薬を作ったんです」

おずおずと、植物をすり潰したものを見せる。
香りをかぐと、ミント系の香りがした。

「分かりました。むこうを向いて上だけ脱ぎますから
　塗って下さい。そのかわり正面には来ないでくださいね」

銀色の青年につかまって背を向け、ワンピースを上半身だけ脱ぐ。

ごくりと息を飲む気配がして、嫌な感じがしたけれど
きちんと丁寧に隅々まで薬をすり込んでくれた。
ずきずき痛んでいた部分がひんやり包まれて
気持ちが良かった。

服を着直して、改めて周囲を見回す。
そこは大きな岩の洞窟だった。

外へ視線を移すと、赤黒い空の下で
ドォォォッと重い空気がうなり声を上げている。

胸が苦しくなる腐臭はあいかわらずだ。
ああ、なんて救いようのない世界…

「醜悪な景色だろう」

私の表情を読み取ったのか、銀色の青年が口を開いた。

「この世界は太古の昔から、ずっとこうだった。
岩だらけの大地と、たちこめる瘴気。
それらに耐えられるエルフ一族と、我ら龍の一族のみが繁栄した。
しかし長きに渡って何の変化もないこの世界に対して
今、世界中に絶望の空気が広まり始めている。
エルフたちは生きる気力を無くし、ただ堕落するばかり。
このままでは、いずれこの世界は終末を迎えることになるだろう」

そう言って空色の瞳を細める。
緑の青年が、言葉を継いだ。

「私たちはそれを食い止めるため
この世界を救うことができる者を求めて、召還したのです。
そして現れたのがあなたでした。
確かにあなたが暮らしていた世界は美しい。
清浄な空気、色鮮やかな植物、多彩な生命たち。
それをこの世界にも、もたらしたい。
そのためのヒントを、あなたから授かりたいのです」

ふ～ん、なるほど。

「分かったわ。でも私は学者なんかじゃないから
導いてくれと言われても、とっても無理よ。
それにここの空気が合わなくて、すぐ死んじゃうかも」

「大丈夫です！」

ずいっと二人が顔を近づけてくる。

「私はあなたの中から直接知識を吸い取りますから」

「私はお前の瘴気をいつでも吸い取ってやるぞ」

あ～、はいはい。そうですか。
そっちが何でも勝手にやるってことね。

でもその度に、ちゅ～されるのかなぁ。
ドラゴン相手に、あんまりエッチな気分になりたくないんだけどなぁ。

まあでも、何をさしおいても、この世界はひどい。
なんとかしたいという気持ちは分かる。

私が頷くと、二人はほっとした顔で微笑んだ。

「じゃあ、とりあえず…　トイレに案内してくれない？」

「…トイレ？」

え、そこからですか？

第3話　難題は山積み（後書き）

トイレがないって、キツすぎる…。

第４話　女王降臨

トイレの詳細について、言葉で上手く説明できる自信がなかった私は
手っ取り早く吸い取っちゃってください、と
金髪の青年（本当はドラゴン）の前で目をつぶった。
なるほど、こういう時には便利だわ。

では遠慮無く、と言って、彼はちゅう～っと口付ける。

もしかして私の記憶から既に知識を得ていたのか
片方の手で私の腰を引き寄せ、指で顎を上向かせる。
恋人同士のちゅうみたいな体勢だった。

タレ目の女たらし風なアナタには、よくお似合いではありますが
そんな風にされちゃうと、女子としてはドキドキ胸が高鳴ります。

思わず固まっている私から、口を離して
彼はふうっと息を吐いた。

「吸い取ってと言いながら、さっきのように積極的ではないんですね」

ぎゃっ。そんなところ突いてこないでよ。
デリカシーがないわね～、と睨み付ける。

「おっととと…　余計なこと言っちゃいました？
　ちゃんと必要な知識は吸い取りましたから
　怒らないでくださいね」

当たり前だ、油断のならない奴め！

そんな私たちのやりとりを、銀髪の青年はじぃーっと見つめていた。

「なんだか面白くないな…」

「あー、スミマセン、スミマセン。
じゃあついでにディオンも彼女の瘴気を
吸い取ってあげたらどうですか？」

ついでって何よ。ついでって！
…おいこら！そんな言葉に乗せられて、早速近付いて来るんじゃなーい！

私が何か言うよりも早く、銀髪の青年がグイッと強引に
私の腰を引き寄せて、ちゅうをする。

抵抗したかったけど、これがまたものすごい力なので
むしろケガしてる背中が痛い！

まあ元がドラゴンですから、常人よりも力があるのは当たり前だけど
相手は人間なんですから、ちょっとは手加減してほしい！

そんな私の思いもむなしく、もがけばもがくほど力が強くなって
逞しい腕が、ギリギリギリギリ…締め付けてくる。

ぎゃ～！　し、死ぬ！

「ディオン！」

その声に、はっとして、青年の腕から力が抜ける。
私はその場にベチャッと倒れ込んだ。

あ〜、かっこわるい潰れ方。
でも本当に死にそうだったので、そんなこと言ってられなかった。

せっかく体の中の瘴気が消えたというのに
ぜーはーぜーはー、締め付けられたところが苦しいよ！

私はゆらりと顔を上げ、めいっぱい呪う目線で言ってやった。

「あまり勝手なことをすると、死にますよ、私」

二人はさすがに表情を凍り付かせ
スマヌ、スマヌ、と必死で頭を下げた。

「今度から、ああいうことをするのは
必ず私の許可を取ってからにして下さい。
でなければこのやわらかい舌を噛み切って死にます。
いいですね？」

二人は更に顔をひきつらせ
ガクガク、ガクガク、何度も頷いた。

そして金髪の青年がオドオドした顔で
洞窟の奥に水の流れる場所があるから
トイレはとりあえずそこで済ませたらどうかと言う。

なんだか綺麗な男の人に、そんなことを言われるのも
あまり気分のいいものじゃないわっ。

ますます機嫌を悪くして、じとっと睨み付ける私の前で
二人はシュンと体を小さくした。

ザマミロ。
せいぜいフォローに苦しみなさい。

つっけんどんな態度も、小一時間もすれば飽きてくるもので
これくらいにしてやるか、と溜息をついた。

でもここで
上下関係をはっきりさせておく必要があるわね。

果実の絞り汁と、串焼きの肉（何の肉かは怖くて聞けなかった）の
おかげで
なんとか座ることが出来るようになった私は
改めて二人と向き合い、膝を叩いて切り出した。

「あなたたちにとって、私のように弱くてちっぽけな生き物は
　虫けらくらいにしか思えないかもしれません
　でも私にだって、意志も人格もあります」

それは自分でも驚くほど、低く落ち着いた口調だった。

傷のための薬草を、せっせとすり潰していた二人は

突然の私の様子に、キョトンと目を丸くした。

「あなたたちには私の知識が必要で
私はここで生き延びる為に、あなたたちの助けが必要です。
ここまでは対等の立場と言えます。

しかし大事なことを忘れていませんか？
私はあなたたちの身勝手な行為によって、自分の意志ではなく
無理矢理この世界へ引っ張り込まれたのです。
そしてあなたたちの抱える問題に
関わらざる得ない状況に置かれています」

言いながら、自分の体の奥にふつふつと熱いものが
こみ上げてくるのを感じた。

「つまり、私たちは、フェアな関係ではない。
あなたたちは私に、大きな借りがあるのです」

驚いた表情だった二人が、徐々に神妙な顔つきに変わってくる。

「私は元いた世界で、何不自由なく暮らしていました。
家族もいたし、友人もいた。
それら全てを一瞬で失ったのです。
あなたたちはその代償を、払わなくてはならない」

我ながら、ずいぶんと偉そうな口調だと思う。
でも何かが体に乗り移ったかのように
不思議とスラスラ言葉が出てくる。

「その通りです」

金髪の青年が片膝を着いて、口を開いた。

「今、あなたが放たれたのは、契約の神の言葉に違いない」

するとその横で、銀髪の青年も片膝を着いた。

「元の世界を奪ったのは、我らの罪。
代償を払うのは、当然の義務だ。何なりと言って欲しい」

勝った！

私は女王顔で笑った。
この世界に来て、初めて笑った瞬間だった。ふはははは

「では、あなたたちの名前を教えて下さい」

は？と目を見開いてから、二人は慌てて背筋を伸ばした。

銀髪の青年が言う。
「私はディオン。３００年前から、この大陸を王として納めている」

金髪の青年が言う。
「私はサハラ。同じく３００年前から、魔力を統べる者として
ディオンの補佐をしています」

「私は坂村樹里。これからよろしく」

う～ん、最後の自己紹介だけ、ちょっと（いやだいぶ）迫力に欠けたけど

まあこれでやっと、ドラゴンさんとのコミュニケーションを、一歩踏み出せました。

第４話　女王降臨（後書き）

主人公って女王キャラだったんですね。筆者も今知りました…。
ではここで、これまでの登場人物の名前をおさらいしておきましょう。
主人公＝ジュリ。銀色のドラゴン＝ディオン。エメラルドのドラゴン＝サハラ。

第5話　滝の下のエルフ

気が付けば、また眠っていたらしい…

先ほどの自分が女王にでもなったような幻影は、「まだ」幻影でしかなく
実際のところはこの世界の腐った空気のせいで、
少しの間しか意識を保っていられないというのが今の私の現状。

短い周期で、眠ったり起きたりを繰り返している。
本物の女王降臨は、もう少し先になりそうです…
それまではなんとしても、生き長らえないと！

心の中で必死に自分を奮い立たせている私を余所に
この大陸の王であるドラゴン・ディオンと
その補佐であり魔力を統べるドラゴン・サハラは、
なんとも残念な呟きを洩らす。

「やはりこのままでは、すぐに死んでしまいます」

召還した張本人のくせに無責任なこと言うな！と
女王は叫びたかったけど、ああいかんせん、体力がありません。

「そのようだな。では場所を移すか」

「そうですね…」

「どんな場所が良いのだ？」

「瘴気が薄く、水があって、僅かでも植物がある場所…
となると、あの場所しか」

「ほお、あの場所か。しかしそれでは
お前が迷惑なのではないか？サハラ」

「な、な、何言ってんですかっ
私は何の関係もございません」

「そうだったかな？」

なんだかまた意味深にモメてるなぁ。

てゆーかこの二人、仲良くていいよねー。
今こっちでひとりぼっちの私としては
ジェラシーすら感じるわ。

「まあでも、そこしかないのなら、仕方がない。
行くか。先触れを出せるか？」

「はい」

話がついたらしく、支度をしているらしき物音がした後に
耳元へ足音が近付いてきた。

私の上で影が動き、ディオンの額の美しいサークレットが視界に入
ってくる。
そこには彼の瞳と同じスカイブルーの石が、美しく光っている。

「ジュリ、ちょっと移動することになった。

私たちは元の姿に戻る。
お前の体に負担をかけることになるだろうから
先に瘴気を吸い取っておくぞ」

えらいっ。ちゃんと事前確認できたじゃない。
さっき上下関係はっきりさせた成果があったわね。

私は小さく頷いて、仰向けになる。
ディオンの唇がやわらかく唇に重なり
生温かいものが侵入してくる。
そこに向かって体内の重苦しい毒気が
勢い良く流れ出て行くのが感じられた。

彼の口付けは私にとって、どうにもこうにも気持ち良くって
ついついこちらからも舌を絡ませに行っちゃうのよね。

ディオンはそれを受けて、一度ビクンと体を震わせたが
なんとか頑張って最後まで瘴気を抜き取ってくれた。

や～、ありがと、ありがと。体がラクになるわ～。

銀髪の青年が端正な顔を赤く染めて、荒い息の口元を拭い
キッと私を一睨みする。

もうかれこれ１０回目くらいだっていうのに
相変わらず反応がウブいなぁ。

彼はむすっとしたまま、素早く動物の皮で
私の全身を包んだ。

次の瞬間、二本の竜巻が起こり
その中から銀のドラコンとエメラルドのドラゴンが姿を現した。

その大きな姿が光を遮り、洞窟の中が暗くなる。

ガラガラガラと、硬いウロコを鳴らして
二匹が私の方へ振り向いた。

スカイブルーの瞳と、エメラルドグリーンの瞳。
この醜悪な世界において
私が唯一、美しいと思う宝石だ。

ぼんやり見とれていると
大きな爪が、私をくるむ布ごとつまみ上げる。

そしてドオオオオッという轟音の中
ドラゴンと共に私は空へ舞い上がった。

袋に入った状態でも、ドラゴン・フライトはキツイ。
空気が激流となり、目を開くことができない。

その上、この空気が、私にとっては毒みたいなもの。
それに当てられて、せっかく瘴気を抜いてもらったばかりなのに
また胸の中でそれが広がってくるのを感じる。

ディオンは「ちょっと移動する」と言っていたくせに
いつまでたっても到着しない。

何度も言ってるけどね（今のように声が出ないことが多いが）
早くなんとかしてくれないと、私、死んじゃうよ？

溜まりに溜まった瘴気に、吐き気を催し始めた頃
やっと速度が緩んだ。

ふわりと下ろされたが、地面はあいかわらずゴツゴツしている。
袋を引っ張って、二匹のドラゴンが覗き込んできた。

「少し速度を落として飛んだのだが、大丈夫か？」

「わっ！　瀕死の状態ですよ！」

慌ててディオンが人間の姿になり、ちゅう～っと瘴気を吸い取ってくれる。

はあはあ、良かった。まじめに死にそうだったわよ。

「急いでパトラに会いましょう。
　彼女なら何か良い手を考えつくかもしれない」

ヒュルッと再び竜巻が起こり、
目の前にあったドラゴンの大きな足が消え失せる。

目を凝らすと、それが随分小さくなっているのが見えた。
（それでも人間の足に比べたら１０倍増しで大きい）

どうしたんだろう？と重い頭を少し上げてみる。

そこには二足歩行のエリマキトカゲみたいのが二匹いた。
ドラゴンよりずっと小さいとは言え
身長は2メートルから3メートルの間くらいだと思う。

それはそれで間近に見ると、すごい迫力。
ヒーロー戦隊に襲いかかる怪人みたい。
小さい子だったら、確実に泣くね。

あ～やっぱり、この世界って爬虫類系なのね…

ん？　片方は青みがかった銀色で、もう片方はエメラルドグリーン。
この配色のペアって、もしかして…

ディオンとサハラ？？？

私の顔色を読み取って、ディオンが説明してくれた。

「ドラゴンにとってエルフは、血筋の近い下位種族だから
　変わり玉がなくても、その姿になることができる」

エルフ…
確かこの世界で繁栄できたのはドラゴンとエルフだけって
言っていたよねぇ。

こんなのしかいないのか、この世界…
おどろおどろ過ぎませんか？

気持ちまで凹んで、息も絶え絶えになっていると

ディオンの方が、私を抱き上げた。
ドラゴンほどではないけれど、ウロコに覆われた皮膚は硬く
鋭い爪のある手は、時折刺さってチクチク痛む。
「すまん、ちょっと我慢してくれ」
そう言って、ザクザク歩き始める。
するとすぐに、水音が聞こえてきた。
近付くにつれて、それが滝であることが分かった。
とても高いところから落ちてきているせいで
地面に着く頃には水が霧になっている。
そこから久しぶりに感じる清涼な空気が
流れ出していることが分かった。
周囲の岩の間には、暗い色の植物が生えている。
ああここは、今までよりも格段に瘴気が薄い。
ほっとして胸の奥から深く空気を吸い込んだ。
ディオンとサハラは私を抱きかかえたまま
滝近くの岩陰へ足を進める。
するとそこに、紫紺のエルフが跪いていた。
「ディオンさま、サハラさま、お待ちしておりました」
むむっ、なんか声が色っぽいぞ。

第5話　滝の下のエルフ（後書き）

やっとエルフが登場しました。それも美女？

第6話　エルフの研究室

「そちらがサハラさまの召還なさった異世界の者ですか。
まあなんと…」

紫紺のエリマキトカゲ…　もとい、エルフさんは
人間の私から見ても、美形なんじゃないかしらと思える
整った顔立ち（あくまでトカゲ顔ですが）を
私の方へ近付けてきた。

「でもなんだか、死にそうですね」

傍観してないで、なんとかしてっ！

「そうなのだ。なんとかこれを死なせないために
そなたの知恵を借りに来た」

ゼハゼハするばかりで相変わらず声の出ない私の頭上で
ディオンがそう説明した。

「分かりました。どこまでできるか分かりませんけど
どうぞお入り下さい」

案内された洞窟は、今までと同じ黒い岩でできていたけれど
テーブルと椅子のような形のものがあったり
デスクの上に羊皮紙のようなもの（きっと爬虫類系動物の皮）が
積んであったり、だいぶ生活感を感じさせる場所だった。

特に奥には、料理道具か実験道具のような細々したものと

木の実に蓋を付けた容器が、山のように並べられていた。

「さて、どこに寝かしましょうか…」

紫紺のエルフは妖艶な割に、フレンドリーな雰囲気で
具合が悪い？　体が痛い？　と、あれやこれや気にしてくれる。

部屋の隅に積み上がっていた干し草に皮をかけて
ベッドらしきものを作ると、ここへどうぞと勧めてくれた。

ゴワゴワしてるけど、今まで寝かせられていた岩の上より
数百倍いいわっ！！

私は安堵感に、ほぉ～っと息を吐いた。

「私はパトラといいます。サハラさまのお膝元で植物の研究をしています。
　と言っても、この世界にある植物なんて、たかが知れてますが」

「ありがとうございます。私は坂村樹里です」

私の微かな笑顔に、パトラは手を伸ばしかけたけれど
自分の爪を見てハッとし、ひっこめた。
う～んやっぱり女性ってどこの世界でも、察しがいいよね。
もっと早くあなたに出逢いたかったっ。

「サハラさまから先触れを頂いていたので、取り急ぎ
　ミーレの実を用意しておきました」

「ミーレ！　そうか、あれがありましたね」

サハラが関心する前で、彼女は
半分に割ったヤシの実みたいな大きな果実を
私に差し出してきた。

鼻を近付けると、ミルクのような香りがする。

「これは私たちが赤ん坊に飲ませるものです。
生まれたてのエルフはこれしか口に出来ません。
体に優しく、栄養もたっぷりです。飲んでみてください」

迷わずゴクゴク喉に流し込むと
淡い甘さが疲れた体に心地よく染み渡った。

「おいしい…」

良かった良かったと、エリマキトカゲ（エルフ）たちは大盛り上がり。

「サハラさま、ジュリから吸い上げた知識を私にも授けて下さい。
彼女を元気にするために、薬や食事を作る必要がありますから」

パトラの言葉を聞いてエメラルドグリーンのサハラは
ちょっと考えてから言った。

「あなたの用意してくれた『変わり玉』を飲んで
私たちはジュリと同じ種族の姿に変われるようになりました。
それはなかなか得難い経験でした。
どうですか？　パトラもやってみませんか？」

パトラはきょとんとして、それからすぐにポンと手を叩いた。
「名案ですわ。ジュリのことを知るのに、それが一番の近道ですわね」
そして、パタパタッと手早く『変わり玉』を取り出すと
ちょっと失礼、と言いながら、鋭い爪で私の髪を2～3本切り取り
それらをさっさと飲み込んでしまった。
う～ん、いくら魔法とは言え、髪の毛飲み込むのに
抵抗ないのかなぁ。
紫紺のエルフの姿は、小さな竜巻にかき消され
そこに新たな人間の姿が現れた。
紫色の長いローブを着た、長い黒髪の女性。
真っ白い肌に、紫紺の瞳を輝かせている。
赤い唇にバラ色の頬。豊かな胸にくびれクッキリのモデル体型。
うわぁ～、パトラさんはやっぱり、とんでもない美人でした。
彼女はさっそく、まあこれは髪の毛？　衣服？
体がずいぶん小さいわ。空が飛べないわ、と
自分を観察しながら大興奮。
だいぶたってから私の視線に気付いて
「これからはあなたに触れることもできますね。
　しっかりお世話しますから、安心していてください！」
と目を見つめながら、手を握ってきた。
うんうん。私も目の保養になって嬉しいです。

そうやって女子が盛り上がっている向こうで
ディオンとサハラも人間の姿に変わっていた。

金髪のサハラの方は、デスクに座って
何やらブツブツ言いながら、ペンを走らせている。

銀髪のディオンは立ち並ぶ木の実の容器の中から
馴れた素振りで一本を選び出し
その中の赤い液体を美味しそうに飲んでいた。酒か？

とりあえずは、この研究室（？）が、生活の拠点になりそうです。

第6話　エルフの研究室（後書き）

ディオンの名前を、何度も間違えていたことに、今頃気付いてしまいました…。
なんて初心者な失敗。主要人物なのに。
気付いていた皆さんは、どうするのかな～って、気になったことと思います。
大変失礼いたしました！（恥）

第7話　幻影

この世界の色彩は、基本的にドス黒い。

空は赤と黒のまだら模様で、太陽や月のようなものは今のところ見当たらない。

水は灰色。ツンと鼻につく匂いがする。間違っても飲もうとは思えない。

地面は黒い岩ばかり。野生生物らしいものは、植物も含めて無いと思っていた。

でもパトラの洞窟の周りには、ダークグリーンやダークレッドの植物が

所々ひょろひょろ顔を出していた。

遙か上空から落ちてくる滝は、空中で徐々に灰色から透明に変わっている。

空中で毒素が飛び散り、地面に着く頃には浄化されているのだそうだ。

パトラとサハラはそれに目を付けて、その場所に研究室を作った。

世界を再生させるための研究室。

しかし、１００年かけても世界を変える程の成果は上げられず

既に二人は精も根も尽き果てていたという。

この世界は今特に争いが起きている訳ではない。

昔には、ドラゴン同士の勢力争いで、戦いばかりの時代もあった。

しかしもともと厳しい環境下で生きてきた彼らに手加減や容赦とい

う言葉はなく
どこまでも戦って、戦って、最後にドラゴンは４匹しか残らなかった。
エルフの数も劇的に減った。

世界には北の大陸と、南の大陸、二つがあって
北をディオンとサハラ、南を別のドラゴンが納めることになったが
激減した上に散り散りばらばらになってしまったエルフたちは
統率するまでもない存在にまで陥ってしまったのだ。
激しすぎる戦いの記憶が、彼らの鋭気をそぎ取っていた。

世界の半分の支配力を持つディオンも、悲惨な状況に気力を失い
もうこの３００年間を、ほとんど洞窟のねぐらで過ごしていたのだ
そうだ。

その様子に、このままではいけないとサハラが思い立ち
滝の浄化作用に気付いていたパトラと手を組んだ。

だがいつまでたっても成果の出せない研究と、
益々気力を失ってくるディオンに、とうとう痺れを切らし
最終手段として、サハラは私をこの世界に召還したのだった。

私が研究室に来てからの
パトラとサハラは、とても精力的だった。

時間が過ぎるのを忘れて、相談しあい、書類を作っている。
この世界で文字や絵を書く奇特な者は、この二人だけらしい。
だから文字自体も二人が考案したものを使っている、と
ディオンがあきれ顔で教えてくれた。

そして時折、予告無く二人は、人間の姿で体を寄せ合いキスをする。

真っ白い肌に漆黒の長い髪が美しいパトラさんと
金髪のくせ髪の下に、目尻の下がった綺麗な緑の瞳を輝かせるサハラのキスは
映画のワンシーンのように美しくて、見ていてとてもドキドキする。

私が赤い顔で、じぃーっと見つめていると
二人は慌てて、手っ取り早く知識を分けているだけです！と否定する。

その横で、ディオンはニヤニヤ笑っているのだ。

実はそういう時、いつも私も巻き込まれている。
つまり、サハラはまず私にちゅう～っとして知識を吸い取ってから
パトラにそれを分け与えているというわけ。

彼は知識の橋渡しをしているだけのつもりなのだが
見目麗しい、見るからに女たらしな彼がそれをやると
両手に女を抱いて代わる代わる可愛がる淫乱男に見えてしまう。

お気の毒なエメラルドのドラゴン・サハラくん。

でも実はサハラはとても真面目で研究熱心な優等生タイプ。
本当に不良なのは、ディオンの方だった。

見た目は銀髪で、端正で、中性的な印象の彼は
品行方正な英雄的性格を想像してしまうけれど
実際は酒飲みで、ぐうたら…
懸命に研究を続ける二人のまわりを、ふらついているだけだ。

侮蔑の色が私の顔に浮かんでしまったようで
それに気付いたパトラが私の耳元にこっそり囁いた。

「昔は本当に英雄だったんです。
いろいろなことがあって、今は気力を失っているだけ」

ふ～ん。
私にはパトラとサハラに甘えて、
ただあぐらをかいているようにしか見えないけど。

そんな日々の中、パトラの努力のおかげで
私はなんとか体力を取り戻し、起き上がれるくらいまでになった。

そして手始めに、パトラに協力してもらい
この世界の植物を煎って、初めてお茶を作ってみた。

ババくさいかもしれないけど、お茶が飲みたかったのよ～。
ズズズ～。ぷは～…

パトラさんと試飲していると、サハラさんもそれに加わり
一緒に飲みながら、口を開いた。

「ジュリの生活の基本である『衣・食・住』ですが
食と住の方は、なんとかなりそうです。
ただ問題が、衣なんです。
この世界には衣服の材料となる繊維の入手が難しい。
綿毛のようなものを持つ植物はありませんし
羊毛のような毛を生やす動物もいません。
辛うじて手に入るのがキトラ（大トカゲみたいの）の皮なのですが
汗を吸い取る機能は低いので、理想的とは言えない」

私は爬虫類系の皮を身に纏った自分の姿を想像して、うえぇっとした。
なんかとっても原始時代的で、嫌だわ…

かと言って、一枚しかないこのワンピースを着続けるというのもね…
ただでさえドラゴンの扱いが荒くて、傷だらけなのに
このまま使い続けたら、ボロボロになってしまうだろうことは
簡単に想像できる。

「物作りが得意なエルフを集めてみようと思うんです」

飲み干したカップを置いて、パトラさんが言った。

「ついでに使えそうなものがないか探してみようと思います。
2、3日、ここを空けますが、ジュリはディオンがいれば大丈夫
ですよね？」

えっ。パトラさん、出かけちゃうの？

イヤイヤなんて言ったら、子どもみたいなので
仕方なく、イイヨイイヨ、と頷く。

「私もパトラと一緒に行こうと思う」

ぎゃっ。サハラさんも？
じゃあその間、ディオンと二人きりぃ？
え～、大丈夫かなぁ？

でも二人は私の服を作ろうとしてるんだよね。
それは頑張って欲しい！　てゆーか切実に着替えが欲しい！

私は二人の手をがっしり握って、言った。

「分かりました。行ってきて下さい！　頑張って！」

そうしてパトラさんは、不在中の食事のこととか
一通り私に説明すると、紫紺のエルフの姿に戻り、飛び立った。
その後に続いて、ドラゴン姿のサハラも飛び立つ。

私はそれを見送った。ディオンの姿は無かった。
この時間だと、どこかで昼寝でもしているんだろう。

「さて、水浴びでもしてこよっかな」

滝の下の、浅い池に、私は足を踏み入れた。
この世界の気温は高い。多分、常に２８度くらいだと思う。

滝下の水はひんやりと冷たくて、気持ちが良かった。
服は着たまま。
なんとなくまだ、この世界で全裸になる勇気が無かったし
ドラゴンには、とっても便利な能力があるってことを知ったから。
竜巻。あれを体の回りに起こしてもらえば
洋服ごとすぐに乾いてしまうのだ。
そうやって今日も気持ち良く水浴びをする。

すると、滝から降ってくる霧の向こう
けっこう近い場所に、ユラリと人の影が見えた。
人？　ディオン？
一歩前に進み出ると、その姿が見えてきた。
それは背の高い、黒髪の青年。
額にはターバンを巻き、生成の短いローブを身に纏っている。
黒い瞳は黒曜石のようにキラキラ輝き
じっとこちらを見つめている。
ディオンとサハラとパトラ以外の、人間？
私の髪と『変わり玉』を飲み込んだのはあの3人だけだ。
その他のこの世界のものが、人間の姿になれるはずがない。

じゃあこれは、私の幻影？
黒髪に黒い目っていうのも、日本人の私と同じだし…
「あなた、誰？」
思わず歩み寄ろうとする私の前で
彼はサッと後ずさりして、走り出してしまった。
え～っ、行っちゃうの？？？
見た目的に、今までで一番、好みだったんだけどなぁ…
やっぱり幻影だったのかな。
また来てくれるかな。
「水浴びは終わったか？」
ガラガラガラと、金属質のウロコを鳴らして
ドラゴン姿のディオンが現れた。
滝の下で水浴びをする女と、銀色に輝くドラゴン。
絵だけ見たら、これこそファンタジーって感じ。
なんだけどなぁ～…
「はい、乾かしてくださ～い」
両手を上げる私の体の周りで、小さな竜巻が起きる。

目の端に、大あくびをするドラゴンの姿が映った。

第7話　幻影（後書き）

景色は魔界っぽいですが、お話はほのぼのになりそうです。

第8話　もの作りのエルフ

「幻影だろうな」

滝で見かけた青年の話をすると
銀髪のディオンはあっさりそう答えた。

私はパトラが作ってくれたスープを温め直すため、
燃える『火村玉（ほむらだま）』をかまどに入れる。

「異世界のものに姿を変えるなんて
そんな力を操れるのはドラゴンだけだし
力を込めた『玉』を作れるのは、パトラ特有の能力だ。
今お前が使っている『火村玉』にしても同じ」

なるほど～。

パトラは私のベッドに使っている干し草を燃やして
そこからこの燃える玉を作っていると言っていた。
よく分からなかったけど、つまりは彼女の特殊能力なのね。

植物が極端に少ないこの大陸で
干し草を用意するのはかなり難しいことらしく
今のところ『火村玉』はまだ1つしか作られていない。

もともとエルフやドラゴンは調理する習慣がないし
（考えると怖いけど、獲物はそのままバリバリ食べちゃう）
夜に気温が下がっても、体がそれに順応しているから
温める必要はない。つまり殆ど使い途がないとのこと。

だからパトラが薬を作ったりする時に
ちょっと使うくらいだったらしい。

というわけで、今は私がほとんど独占。
ここの生肉なんて恐ろしくて食べられないし
夜の寒さは辛いので、あって良かったわ。ありがとう！

実験道具の山の中から、お玉もどきを取り出して
私はスープをかき混ぜた。

再び滝で見かけた青年のことを考える。
そしてふと、もう1つの可能性に思い当たった。

「私の他にも誰か召喚された人がいるとか」

「それはないな」

いつものように容器の群れから
ひょいとお酒の入った一つを持ち上げてディオンが即答した。

「お前のような異分子がこの世界に入り込めば
その気配でドラゴンにはすぐ分かる」

彼は言いながら、一瞬だけ視線を止めたけれど
すぐにいつもの様子に戻る。
ポンッとお酒の蓋を開け、ぐびぐびぐび…

あ～あ、黙っていれば美青年なのに
中身は飲んだくれおやじなんだからな～

スープがグツグツと音を立て始めたので
『火村玉』をかまどから出して、ディオンに火を消してもらう。
この火を点けたり、消したり、はドラゴンの魔力でしか出来ない。

木の実の器にスープを入れて、ディオンにも手渡す。
中身はキトラ（大トカゲ）の肉と、香草のような植物。
珍しそうに覗き込んでから、彼はそれを口に運んだ。

「お前たちの世界の食事は面白いな。
　わざわざ手をかけて作るのは、酒だけだと思っていた」

いつも食事には、研究熱心なパトラとサハラが付き合ってくれて
ディオスは今まで一緒に食べたことがなかった。
外で済ませてくる、と言って、一人で飛び立ってしまうのだ。

ドラゴンの姿でキトラをバリバリ1匹食べてしまえば
それで一日分の食事は終わりなのだそうだ。ぞぞぞ…

でも今日は二人がいないので、私の食事に付き合ってくれている。
こういうところは、優しいんだけどねぇ。

「しかし、いくら一日3回食べるとは言え
　こんなものばかりじゃ、精がつかないな。
　早くもっといろいろものを食べられるようにしないと」

ディオンは考え深げな色を瞳に浮かべて続けた。

「食事が終わったら、少しこの周りを見てみるか？
　私は植物のことは分からないが、滝の周りにはめずらしい生き物

がいるから
　何か使えそうなものが、見付かるかもしれない」
私が頷くと、銀髪の綺麗な青年は、少しだけ笑った。
そして空色の瞳を揺らしながら、顔を近付けてくる。
「瘴気を吸い取るぞ。いいか？」
耳元で囁かれ、くすぐったくて
思わず頬を染めた。
ドウゾ、お願いします。
形の良い唇を見ながら目を閉じる。
ひんやりとした感触の後に、温かいものが入ってくる。
私は胸から瘴気が抜けていくのを感じて、うっとりする。
だいぶこういうのに馴れてきた。
でも恋人同士のような錯覚を抱きそうで、怖い。
今もディオンの手に触れたいのだけれど
それはぐっと我慢した。

そして私たちは、洞窟の外へ探検に出かけた。
瘴気の影響があるから、せいぜい1時間ほどだったけど
でもそのおかげで、滝下の浅い池の中に
エビのような生き物を見つけた。食べられそう。
それから、ゆっくりね！と10回くらい強調してから

ドラゴンのディオンに、滝の上まで連れて行ってもらった。

しかしその川の流れは灰色で
周囲には岩以外、何も見当たらなかった。
まあその辺は予想していたけど。

高いところから探せば
もしかして滝で見た人を見つけられるかもと
密かに淡い期待もあった。

全て空振りだ。ま、こんなこともあるよね。

そこはとても険しい岩山の一角で
大地を遠くまで見渡すことが出来る。

どこまでもどこまでも、黒い岩だけが続く荒野。
本当に、植物があるのはこの滝の下だけみたい。

想像を絶する不毛な風景に
私はゾッとして、思わずドラゴンの硬いウロコに手を伸ばした。
常に魔力に満ちているドラゴンの体は
触れる直前で、ピリッと電気が走った。

痺れる手を戻しながら
自分という存在が、この世界の全てに拒絶されているような
恐ろしく寂しい気持ちに陥っていった。

洞窟に戻り、瘴気を吸い取ってもらってから

私は暗い気分をなんとかしたくて
ディオンがいつも飲んでいるお酒をもらった。
私の様子になんとなく気付いていたらしい彼は
黙って器に分けてくれた。
真っ赤な液体はトロリとした舌触りで
意外なことに、甘かった。
この世界に来て、甘いものを口にしたのは初めてだ。
と思っていたら、とんでもなく強いお酒だったみたいで
キュゥッと一瞬で意識を失ってしまった…

どれくらい眠っただろうか。
久しぶりにとても深く眠りに落ちたような気がする。
体を動かすと、ゴワゴワのベッドとは違う感触が隣にあった。
何だろう？と目を開けると、すぐ近くにディオンの顔。
長い睫の影がかかる綺麗な頬。
ドラゴンの時は電気が走って触れなかったけど
今なら平気かな？
そっと手を伸ばし、指先で確認する。
やわらかくて温かい感触。
するとディオンが薄く目を開ける。

「目覚めたか。気分はどうだ？」
頷きながら、宝石のような青い瞳に見とれる。
とても綺麗で、吸い込まれそう。
するとゆっくり、彼の唇が近付いてきた。
無言だったけど、私はそのまま受け入れた。
唇を重ねるたびに、触れ方が優しくなっている気がする。
思い上がりかな…？

その時、洞窟の入口の方で、バサバサ大きな音がしたので
私たちはガバッとそこを飛び上がった。
ん？なんかまだ瘴気抜いてなかったような？
しかし羽音は更に大きくなってきたので
とりあえず入口の方へ急いだ。
ディオンは素早くドラゴンの姿に戻った。
「サハラか。早かったな」
ディオンの後ろから外を見ると
エルフ姿のサハラとパトラさんが並んで立っていた。
そしてその背後に
いくつもの大きな影が舞い降りてきた。

それは青や緑のエルフたち。
ざっと数えて６人ほど。

巨大エリマキトカゲがそれだけ並ぶと圧巻だった。
ディオンの姿を見て、ザザザッと彼らは身を低くした。

「もの作りのエルフたちが
小さな集落を作っているのを見つけたの。
事情を話したら、来てくれたのよ」

パトラが言うと、その中の一人、緑色のエルフが
ザクザクと前に歩み出て、うやうやしく頭を下げた。

「ディオンさま。お久しぶりでございます」

「アルゴか。久しぶりだな」

「これからは彼らにも、私たちの研究に参加してもらおうと思います」

サハラは弾んだ声で言った。
なんだか研究室が賑やかになってきました。

第8話　もの作りのエルフ（後書き）

ジュリとディオンの甘々な時間でした…。
さて次から、登場人物（エルフ）が増えてきます。

第9話　赤と黒

ディオンとサハラが納める北大陸の反対側。
南大陸は瘴気の嵐に覆われていた。

荒れ狂う雲の下、黒い岩の大地には
所々、マグマが吹き出す裂け目があり
空と同じ、赤と黒のまだら模様になっていた。

雨は降っても灼熱の大地に焼かれ
一瞬にして干上がる。
瘴気の嵐が我が物顔で暴れまわり
水すらもない土地。

植物はもちろんのこと
エルフであっても、
ここで生きられるのは
限られた種族だけだ。

今にも破裂し大爆発を起こしそうな地面下のマグマ。
それを押さえ込んでいるのは
静かなる漆黒のドラゴン・エリアスだった。

彼は南の大地の王でありながら
マグマを押さえ込むことに全魔力を注いでいるため
動くことができない。
もう３００年もの間、硬く両目を閉じ
彫像のように同じ場所で鎮座している。

その補佐にして守護をするのは
深紅のドラゴン・グリール。

火の魔力に満ちたグリールは
本来、荒くて豪気な性格だったが
エリアスに対する忠誠心が強く
その守護をするようになってからは
すっかり焔を潜めてしまった。

ただ、エリアスの求めに応じて
僅かに残る南大陸のエルフたちの救済だけはする。
しかしそれ以外でエリアスの側を離れることはしなかった。

ふと、深紅のドラゴンが
漆黒のドラゴンに視線を走らせた。

「思念を飛ばしていましたね」

エリアスはその問いに思念で答えた。

『ディオンとサハラが何やら動き始めたようなので
少し様子を見てきた』

「異世界人を召喚したのですね」

『召喚の代償に、バカな真似をしようとしている。
目的を果たす前に、考えを変えさせなくてはならない』

グリールは深紅の瞳を静かにエリアスへ向けながら

思念を受け取ることに集中した。
言葉にならない思いも、取りこぼすことがないよう
細心の注意を払う。

『私が思念を飛ばすことができるのは
僅かな時間だけだ。
代わりにお前に、あの二人と話をしてきてもらいたい』

エリアスもかつては、強大な力を操る
豪胆なドラゴンだった。

今は穏やかで慈愛に満ちた思念だけを
送ってくる。

それはすでに神に近い領域だと
グリールは感じていた。

全ての思念を受け取り終わり
赤いドラゴンは無言で頷いた。

第9話　赤と黒（後書き）

エルフよりも先に、ドラゴンキャラが増えましたね。
筆者自身がジュリの見た幻影のことを忘れてしまいそうだったので
ここに短いながらエピソードを挿入しました。
お気づきのことと思いますが、そんな書き方をするヘタレ筆者です。
温かく見守って下さっている読者の皆様に、心から感謝。

第１０話　エルフたちのお引っ越し

エルフはドラゴン同様
空を飛ぶことができる。

威嚇するエリマキトカゲのように
背中に大きなヒレのような皮膚が広がっていて
そこに翼が畳み込まれている。
広げると両翼合わせて５メートル近い。

新たに現れたエルフたちは
滝を挟んだ反対側の洞窟へ
自分達の仕事道具を運び込むことから始めた。

入れ替わり立ち替わり
バサバサと派手な羽音をさせて
皮袋を運んでいる。

私は滝の手前からその様子を
しばらくずっと眺めていた。

トカゲの様な顔に、縦長の無機質な瞳。
大きくて恐ろしいエルフだけど
空を羽ばたく姿は美しかった。

それに彼らがどんなものを運んでくるのかにも
興味があった。

ただ、何頭ものキトラ（大トカゲ）を袋に詰め込んで

４人がかりでぶら下げてきた時には
さすがにのけ反った。

彼らはキトラを飼育しているのだそうだ。
てそれは、ここで飼うってことだよね～。

ギュッギュッと皮膚を鳴らしながら
うごめくその物体は
サイくらいの大きさがあった。

思わずイヤ～ッて顔をしていたら
パトラが「大人しいから大丈夫」と
声をかけてきた。

エルフから見て大人しくっても
弱っちい私には狂暴なんじゃないでしょうか。
その辺の力関係は動物の方が
本能的に敏感だし…
とりあえず出来るだけ
近付かないようにしよう、うん。

そして最後にエルフたちが
運び込んできたのは
ミーレの実の殻だった。
１００個以上もある。
入れ物にでもするのかな？

そんなところで、一旦休憩。

みんなでランチタイムと相成りました。
滝の下で見つけたエビのような生き物を
『火村玉』で焼いているローブ姿のパトラ。
それをエルフたちは押し合いへし合いしながら
覗き込んでいた。

その様子を見上げて
パトラは少し考え、口を開いた。

「これからの仕事のことを考えると
皆さんにもジュリと同じ種族に
変わって頂いた方が良さそうですね」

彼女が視線を投げ掛けた先の
サハラは大きなため息をついた。

「まあ、そうだろうね」

くしゃっと金髪に手を当てて
面倒くさそうな顔をする。

「『変わり玉』６個か。
結構、ヘビーだけど
まあ、頑張りましょ」

結構へビーなんて言っていたけれど
食後のお茶を滝のところで
ディオンと飲んでいる間に
それは６個、出来上がった。

ただ体力をそれなりに消費したようで
回復のため通常の彼らの食事をしに
サハラとパトラは
ドラゴンとエルフの姿で飛び立った。

残された私とディオンとエルフたち。

昼食後、必ずお昼寝をするディオンは
何かあったら呼んでくれ、とだけ言ったかと思うと
銀色のドラゴンの姿で滝の霧の中に入り
ぐるんと丸くなって午睡…

その姿に呆れて何も言えないでいる私に
エルフたちの視線が集中するのが分かった。

あ、そうだよね。
『変わり玉』が揃えば
次に必要なのはただひとつ。

「えーと、では早速やってみますか？」

まだあまりエルフたちと会話したことのない私は
おどおど聞いてみる。

よろしくたのむ、とエルフたち。

ハイハイ、では。

髪の毛を少しつまんで
エルフさんに爪でスパッと切ってもらう。

こんなもん、すみませんねぇと
申し訳なく思いながら
それを1本づつ分けて渡していった。

皆さん、躊躇なくそれを『変わり玉』と一緒にゴックン。

シュルルル、ドロンと
6名さまの出来上がり。

灰色の髪の初老の男性を中心に
背の高い若い男性が二人。
ほっそりした若い女性が二人。
そして赤毛の小柄な少年が一人。

皆同じ紺色のローブをまとっていた。
まさに職人の一団という雰囲気。

彼らにとっては変身後の繊細な指先が
一番、興味を引く部分だったらしく
わいわい言葉を交わしながら
その動きを確かめあっていた。

最年長の男性だけはその騒ぎに加わらず
私の方へ近付いてきた。

「あなたにはこの姿の方が
親しみやすいでしょう。
改めて、私の名はアゴル。
齢９００年の年寄りですが
まだまだ探求欲は健在です。
お役にたつことができれば
嬉しいと思っています」

９００歳なんて、現実味のない数字だ…
でも低く落ち着いた声には
親しみを感じた。

「坂村樹里です。ジュリと呼んでください。
よろしくお願いします」

思わず、大学で一番尊敬していた教授に対する時と同じ
お辞儀をしてしまいました。

そうそう、すっかり忘れていたけど
私はこの世界に来る直前まで
大学生をやっていました。
まあその辺の話はおいおいに…

「仲間をご紹介しましょう」

アゴルが手招きすると
他のエルフたちが慌てて駆け寄ってきた。

「まずは石の加工を得意とするイーサッキ」

栗色の髪と瞳のがっしりした男性が進み出た。
「アゴルの次に年長。と言ってもたかだか５００年ですが。
よろしくお願いいたします」
言いながら大きな拳を目の前にかざす。
意味が分からず首を傾げると
「拳と拳を合わせるのは
エルフ流の挨拶です。
あなたの世界では
いかがですか？」
あ、そういうことですか。
「私の世界では握手をしていました。
まず、その手を開いて、そうそう。
そしてこうです」
私はイーサッキの硬い手をきゅっと握った。
彼は目を見開き、驚いた様子で口を開いた。
「あなたの手は、ずいぶんとやわらかいですね…」
私は苦笑しながら答える。
「ディオンもサハラもそう言っていました。
確かに私はみなさんと比べると
力も体も遥かに弱くて…

この世界での生活は大変です」

するともう一人の男性が
イーサッキの横に進み出た。

「私はキリルと言います。
火・風・水といった自然現象を
扱うことを得意としています。
あなたの状況はパトラから聞いています。
何かお役にたてたら嬉しいです」

ハニーブロンドの髪と琥珀色の瞳の彼は
イーサッキよりもずっと細い印象だった。

「ありがとうございます。
よろしくお願いします」

私はキリルとも握手をした。

「そしてこちらが姉妹のエーヴィとイーナだ。
姉のエーヴィはイーサッキの妻でもある」

アゴルに言われて
ブロンズの髪のよく似た姉妹のうち
目力バッチリの方の女性が
先に手をさし出してきた。

「エーヴィです。妹と薬の研究をしています。
パトラさまは私たちにとっては偉大な教師です」

続いて、ふんわりと優しい雰囲気のイーナさんも遠慮がちに手をさしだした。

「妹のイーナです。まだまだ姉の手伝いしかできませんが
よろしくお願いします」

私はヨロシクヨロシク、と二人と握手をした。

パトラさんの時もそうだったけど
エルフは人間の姿になっても
皮膚や筋肉が硬い。
だから彼らが私に触れるたびに
やわらかいと驚くのも分かる。

「そして最後に最年少のヤーンなのですが…
ああ早速、この姿をキトラに
覚えさせに行っているようです」

アゴルの視線の先に目をやると
柵の中のキトラの頭を撫でている
赤毛の少年の姿が見えた。

「彼にはキトラの飼育を任せています。
少し仕事に夢中になりすぎる質なので
後でちゃんとご挨拶するように言っておきます」

動物好きかぁ。後で私から声をかけよう。
キトラの傍にいない時にでも…

「さて、パトラからあなたの衣服を作る相談を受けていますが…

今、あなたと同じ種族の姿になり
衣服というものを纏ってみて
なかなか難しそうだと考えています」

う～ん、やっぱり？

私もね、ちょっと難しいよね～って思ってました。

「でも…」

そう言い淀み、アゴルは
待っていて、のジェスチャーをしてから
彼らの洞窟へ足早に入っていった。
そして見慣れたひとつの物体を手にし
戻ってくる。

「ミーレの実の殻ですか？」

私が聞くと彼は頷いて
顔の前までそれを持ってきた。

「この殻の外側は、よく見ると繊維質なのです。
私はこれが使えるのではないかと
思います」

おおお！　さすが９００年生きてるだけのことはある。
素晴らしい観察力です。
今日から教授と呼ばせてください！

第１０話　エルフたちのお引っ越し（後書き）

ジュリちゃんが、召喚前のことを初カミングアウト。

第１１話　サハラ先生の講義

その日は新しく仲間となったアゴルたちに
サハラが私から得た知識を講義するということで
一緒に参加させてもらうことにした。

洞窟の前にエルフたちがずらりと並んで座り
書類をかかえた人間の姿のサハラさんが
その正面に立った。

ドラゴンのディオンはあくびをし
サハラの後でウトウトしている。

「まず最初に、ジュリのいた世界と
　この世界との違いを簡単に説明しよう」

すると一枚の書類を広げて見せた。

そこには青い海と空。緑の植物。
海面を飛び跳ねる魚。草原を駆け抜ける動物。
そして立ち並ぶ建物と、そこで生活する人間たちが描かれていた。
その精密さに、私は息を飲んだ。

「これはイーナが描いた。
　彼女にこんな才能があるとは、私も知らなかった」

言われてイーナが俯く。

「あの、サハラさまにこの風景を見せて頂いて

あまりの美しさに、夢中で描きました」

その声には乙女らしい恥じらいの色があった。
なるほど、彼女はサハラのちゅう〜で
私の世界の景色を見せてもらったのね。

華奢で大人しいイーナと、金髪タレ目のサハラの
ラブシーンを想像して、罪作りな男…とつい思ってしまう。

そんな私を余所に
エルフたちはイーナの絵をしみじみと見て
感嘆の声を漏らした。

「この絵のように、ジュリの世界は色彩にあふれている。
空気も水も清浄で、気候も季節も変化に富んで
それらが多種多様の生命を誕生させている。

その中で、ジュリの種族である「人間」は
飛び抜けて知能を発達させた。
皮が薄く、力も弱かったが
それをその知能でカバーし
やがで世界を覆い尽くすほどの繁栄を遂げる」

そう言って、飛行機やヘリコプター、車や電車の絵を
アゴルたちに渡した。

もの作りのエルフたちは、それを見て色めき立った。

「それに対して、この世界は
常に瘴気に覆われ、空は赤黒い雲に埋め尽くされ

色が変わることはない。季節の変化もない。
水も灰色で動物も植物も育たない。
それらに耐えることの出来るエルフとドラゴンだけが
生き伸びている。それも
過去の戦争のため、既に僅かしか残っていない。

エルフもドラゴンも魔力と生命力が強く
道具を持つ必要がなかった。
だから文明を持たない。
もしこのまま絶滅することになったら
きっと岩陰の貧弱な植物と同じように
何の痕跡も残さずに、消えていくだけだろう」

話しながら、サハラの顔は徐々に苦痛に歪んできた。
私もエルフたちも、その様子を固唾を呑んで見つめた。

「私はこのまま、終わりたくない。
この世界を再生させ、私たちの存在する意味を
この世界に残したい」

彼らの気持ちは分かるような気がした。
でも人間である私からすると
人間だって、そんな偉い存在じゃないと断言できる。

正義の言葉をふりかざし
その裏は私利私欲で渦巻いている。

地球のため、世界のため、と口にしながら
自分たち人間の都合しか考えていない。

所詮、自分の価値観でしか世界を捉えることができない
愚かな生き物だと思う。

でも今ここで、そんなことを言っても
これから世界を再生しようとしている彼らを
否定することになり兼ねない。

それにいくら召還されたからと言って
彼らの意志の部分にまで
私が踏み込むべきではないと思った。

サハラは少し呼吸を整えてから
改めて顔を上げ、エルフたちに視線を送った。

「これから君たちに手伝ってもらいたいのは2つだ。
ジュリの身辺を整えること。
水を浄化し、植物を増やすこと。
そこで、チームを二つに分けようと思う」

サハラはまた違う書類を配った。
それは彼とパトラは作り出したという
象形文字だった。

物の形に近い文字なので
何も知らない者が見てもなんとなく意味が読み取れる。
どうやらこれから始める作業の工程表のようだ。

「パトラとイーサッキ、エーヴィ、ヤーンは
ジュリの身辺の方を。

私とアゴラ、キリル、イーナは
浄化と植物の方を担当しよう」

エルフたちは、ふむふむと頷いた。
というわけで、おもむろにお仕事開始です。

みんなで力を合わせて、がんばろー！

第１２話　幻影再び

「1、2、3、4・・・・・・」

私が書く文字を、サハラさんとパトラさんは
食い入るように見つめている。

サハラさんは既に数字の概念を
私の知識から吸い取って理解しているのだけれど
目の前で実際に文字を書いているのを見るのは初めてで
おぉ～っと感嘆の声を上げている。

ディオンも最初のうちは興味ありそうに覗き込んでいたけど
結局、あくびをして、昼寝をしに行ってしまった。

「ディオンって、なんか寝てばっかりですよね」

彼の背中を見送りながら、呆れ声で言うと
サハラさんが下がった目尻を更に下げて、苦笑した。

「２００年ほど、眠り続けていましたからね。
まだ完全には体が起きていないのでしょう」

ちょっと意外な返答で、私はキョトンとした。

「２００年ですか？」

「そう。まあいろいろありましてね。
ふてくされて寝ちゃってたんですよ。

彼は強情だから、いくら起こそうとしても
まったく反応してくれなくて。
召還されたあなたが降ってきて
やっと目覚めたんですよ」

えっ。

「私ってディオンの目覚ましだった訳ですか？」

サハラは肩をすくめた。

「えーと、はいまあ、本来はそうではないんですけど
そうなったらいいな、という気持ちもあったことは否定できない
…かも」

「つまり、そうだったんですね」

私がじとっと彼を見ると
サハラはますます小さくなった。

「あまり責めないであげてください」

パトラは紫紺の瞳で、ふんわり微笑んだ。

「ディオンの眠りはとても深くて
このままでは石になってしまうのではないかと
皆、心配していたんです。
彼はこの大陸の王でもありましたからね。
だからジュリに起こしてもらって
本当に感謝しているんですよ」

パトラさんにそんな風に言われてしまうと
許さないわけには…

感謝されるのならいいか、と
私は渋々、納得することにした。

でも２００年も眠っていたなんて
どうしてそんなことになっていたのだろう…

「パトラ！　そろそろ例の相談をしたいのですが」

キリルがそう言いながら、つかつか部屋に入ってきた。

「そうでしたね。では私はこれで」

パトラが軽く会釈をしから、さっと身を翻す。
見るとキリルさんの手にはミーレの実の殻から採った
繊維の束が、いくつも握られていた。

普通に生活していた頃は
洋服なんてお金さえあれば簡単に手に入ったけど
あの繊維の束から作り出すのは
ものすごく難しいし、時間もかかりそう…

一抹の不安はある。
でも、彼らなら出来る気がする。

もの作りのエルフたちは、とても働き者だから。

彼らは食事と睡眠の時間以外は全て
仕事に当てていた。

成功に喜ぶことよりも、難しい問題に悩んだり
失敗続きに嘆くことの方がずっと多かったけど
それでも辛そうな顔など見せず
いつも生き生きと仕事に取り組んでいる。

私はその姿を、尊敬せずにはいられなかった。

「私はこれから、数字を書く練習をしようと思います。
ジュリは休憩していいですよ」

サハラはニッコリそう言って
すぐに私の書いた字と睨めっこを始めた。

こういう時の、彼の集中力もすごい。

慣れっこになった私は
はい、は〜い、とその場を離れた。

「さて、滝で水浴びでもしてこようかな」

この時の私は、まだ彼らの行動に
何の疑いも抱いていなかった。

そして私は再び、幻だと思っていた黒髪の青年を見たのだった。
滝下の霧の向こうに、ぼんやり影が見え
すぐにそれが彼であると直感した。
一歩踏み出すと、宝石のように綺麗な漆黒の目が
こちらをじっと見つめているのが分かった。
「あなたは、誰ですか？」
私が問いかけると、彼は口を開いた。
でもそれは答えではなかった。
「彼らの行動をどう思いますか？」
綺麗な声に、ドキンとする。
とても穏やかで、そして清流のように清らかな青年の声。
思わずもっと聞かせて欲しいと声に出しそうになる。
そんなこと言ったら、怪しまれるわっ。
私がグッと思いを抑えて黙ったままでいると
神話の登場人物のような、凛とした佇まいの彼は
こちらを見つめたまま、再び問いかけてくる。
「何かを得ようとする時
必ず別の何かを失うことになる。
その失うものが

手放してはならない大切なものだったとしたら
あなたはどうしますか？」

彼の清らかな声と存在感に、うっとりしてしまった私は
その言葉の意味を半ばも理解できないでいた。

すると彼は、ふっと悲しそうに笑みを浮かべて
視線を落とした。

「今は分からなくても
どうぞ考えてみて下さい。
今、ぼくが言ったこと」

そしてくるりと向きを変え、その場から消えてしまった。

「待って！」と追いすがったけれど
その声は簡単に、滝の音にかき消されてしまった。

私の脳裏には、彼の寂しそうな微笑みと言葉が
何故か小さい痛みを伴って、刻まれた。

第１２話　幻影再び（後書き）

ジュリちゃんは、黒髪の美青年がお好みのようですね。

第１３話　進化するドラゴン（１）（前書き）

前回から、だいぶ時間が空いてしまって、申し訳ありません。引き続き、よろしくお願いします。

第１３話　進化するドラゴン（１）

あれから何回も、黒髪の青年の夢を見るようになった。
彼はいつも悲しみの色を瞳に浮かべて
じっとこちらを見つめている。

何かを得ようとする時
必ず何かを失うことになる
それが失くしてはならない大切なものだったとしたら…

彼の言葉が何度も頭の中でこだました。

あれは、何だったんだろう。
もしかして、ディオンとサハラがやろうとしていることを
指しているのかな。

気が付くと、彼が誰なのか、ということよりも
彼の発した言葉の意味のことの方が
気になって仕方がなくなっていた。

今日もそのことを考えながら
ぼんやりと眠りから覚める。

そんな私に気付いて、緑のローブ姿の
サハラが歩み寄ってきた。

「あの…、目覚めたばかりのところですみませんが
久しぶりに、いいですか？」

少し遠慮がちに、こちらの顔色を伺っている。
どうやら彼は、私が起きるのを待っていたようだ。

「あ、えっと。知識を、ということですよね？
はい、どうぞ」

私はまだ眠い頭をこっくり縦に振って、ぼんやり答えた。

そう言えばディオンとは瘴気を抜いてもらう関係で
寝る前と起きた時に必ず、ちゅうするけれど
研究に熱中していたサハラとは
ここ何日かしてなかったな…

そんなことを考えながら、瞼を閉じて上を向く。

サハラは私の横に座り
そっと背中に手を回してから
ゆっくり唇を落としてきた。

唇を割って、彼の温かい部分が侵入してくる。

ディオンの時とは、微妙に違うキス

ディオンは私の体を労るように
瘴気を取りこぼさないように
隅々まで丁寧に、吸い取ろうとするキスだ。

それに対してサハラは
未知な何かを探り出し、汲み取ろうとする

まさに探求心溢れるキス。

久し振りだったせいか、最初の内は遠慮がちだったけど
今日の彼は、徐々に情熱的になっていった。
奥へ奥へ、入り込み
もっともっとと求めてくる。

するといつの間にか、背中に回された手も
何かを探るように動き出す。

思わずゾワッと体を震わすと
サハラは綺麗な顔を、離した。

私は頬の熱さと、荒い息が恥ずかしくて
必死で呼吸を整えた。

しかし彼は、それだけでは開放してくれなかった。

「すみません、今日はもう少し…」

ぐいっとサハラの手に力が入り
私は思いがけず、ベッドの上に押し倒された。

声を出す隙もないままに、再び唇が重ねられる。

知りたい。感じたい。もっと…

そんなサハラの声が、聞こえたような気がした。

更に熱を増した彼の舌が、強く求めてくる。

私がそれに応えると、更に濃密に絡み付いてくる。
そしてサハラの綺麗な指が、私の頬の輪郭をなぞり
首筋をなぞり、私の形を確認するように動く。

肩をじっくりなぞり
鎖骨をじっくりなぞり
やがて胸の柔らかい部分へさしかかる。

あ…　と声を漏らしそうになったその時
ガバッと彼の体が引きはがされた。

びっくりして目を開けると
真っ赤な顔でワナワナ震えるサハラがいた。

どうしたの？と首を傾げる。

サハラは弾かれるように立ち上がり
ちょっと失礼、と目線を外しながら言う。
そして手でグイッと口元を拭ってから
その場を走り出した。

部屋の中にいたパトラとディオンが驚いた顔で見つめる中
彼は洞窟を出たところまで行って
あっという間にエメラルドグリーンのドラゴンの姿に変わる。

大きな翼を広げ
ドォォォッと風を巻き起こして
そのままそこを飛び立ってしまった。

「研究のし過ぎだな、あれは…」
ディオンが、ぼそっと言った。
「そうですね」
パトラは大きな溜息をついた。
確かにサハラは研究熱心だ。
もの作りのエルフたちも凄いが
彼の情熱はそれを上回っている。
そして時折
彼の視線が宙をふわふわ泳いでいることがあって
実は気になっていた。
少し、頑張りすぎなんじゃないかな、と
私も感じていたところだった。
「彼らの行動をどう思いますか？」
なぜか黒髪の青年の言葉が、よぎった。
難しい…
私には、まだよく分からない。
でもサハラとはいつか
じっくり話をしてみた方がいいかもしれない。

そう思った。

この世界は、常に空の色が変わらないので
私には昼と夜の区別がつかない。

でもドラゴンとエルフは、なぜかそれが分かるらしい。

理由を聞いても、とても感覚的なことらしくて
言葉にすることが難しいという理由で、答えてもらえなかった。

ということで、いつの間にか今は夜。

いつものように、ディオンに瘴気を抜き取ってもらい
おやすみなさい、と言葉を交わす。

彼は銀色のドラゴンの姿に戻り
ザララララ…と丸くなって、一瞬で眠りついた。

その向こうで、パトラさんもすやすや…

私はなんとなく寝付けなくて、洞窟の外に出た。

まだ戻って来ないサハラのことを思うと
なんだか心がツキンと痛む。

今度会った時、うまく話ができるかな…

遙か上空から落ちてくる滝を見上げてから
膝を抱えて座った。

すると、ザクザク…　足音が近付いてきた。
振り返ると、緑のローブを着たサハラだった。

「お帰りなさい」

そう言うと、伏し目がちに頷いてから
彼は金色のくせ毛を揺らし、私の目の前に座った。

「先ほどは、すみませんでした」

私は、どうして？と首を傾げた。

「なんだかちょっと、やりすぎだったなと…」

しゅん、と彼はタレ目の目尻を更に下げて
体を小さくする。

思わずかわいくて、クスクス笑うと
彼は赤くなって、気まずそうにした。

「サハラの目が、『へ』の字だよ」

は？と、彼が目を見開いたので
地面に指で、『へ』と書いて見せる。

「私の世界で、これを『へ』と読むの」

へぇぇぇぇ〜、と真面目に感心する金髪の美青年。
その様子に、私は思わず、ブッと吹き出してしまった。
「あ、あ…、今のからかいましたね！」
彼は耳まで真っ赤にして、あたふたした。
「まったく…！ドラゴンをからかうなんて、あなたくらいですよっ」
やば。怒り出す前に、ちゃんと話をしなくちゃ。
私は、ごめんごめん、と謝ってから
それとなく、切り出した。
「何でも研究しようとするのが、サハラの良いところでしょ。
私はそれを悪いなんて、思わないよ」
それを聞いて、サハラはスッと息を飲んだ。
整った白い顔に、思慮深い色が浮かぶ。
「私は…、少し焦っているんです」
少し俯いて、彼は静かに言った。
「早くこの世界をなんとかしたくて。
でもあなたの中にある知識量は膨大なだけでなく
とても緻密だから…
全て吸い取るだけでも大変なのに、その後
私の脳の中で、きちんと咀嚼する必要があるんです。

あなたの世界とこちらの世界は、あまりに違うから」
サハラは、ふぅ～っと大きな溜息をついた。
「いつになったら、この世界を変えることができるのか
検討がつかないんです…」
やっぱり彼は悩み、そして焦れていたんだ。
彼が自ら背負っているものはとても大きい。
私なんかが口出しできるようなことじゃない。
でもなんとか彼を安心させてあげたくて
私はとりあえず思い付くことだけを口にした。
「焦るな、って言っても、無理だと思う。
だから、私には遠慮しないで
知りたいこととか、焦る気持ちとか
ぶつけて、いいですよ」
サハラはびっくりした顔で、こちらに視線を向ける。
「知る、っていうことは
単に情報を頭に詰め込むだけではなくて
自分の五感を使って体験することの方が
ずっとよく理解できたりするもんです。
だからいろいろおしゃべりしましょうよ。
あ、あと、触れ合うのも良いかも」
私はサハラの両手に手を伸ばし、持ち上げて

二人の顔の高さで、指と指を組み合わせた。
「私たちの世界では、成長段階で
こういうスキンシップをとることが
とても重要だと考えられているんですよ」
握り合う両手の向こうで、サハラがポカンと
口を開けてこっちを見ているのが分かった。
私は小さく笑ってから、片方の手を
私の頬に当てがった。
「何をやっているんだ」
不意に低い声が聞こえて、振り向くと
すぐそこにディオンが立っていた。
銀髪の下の綺麗な顔に
不満そうな表情を浮かべている。
「ええっと…、知識を吸い取るだけでなく
他の方法で知ってもらおうと…」
私が最後まで言う前に、ディオンが身を乗り出してきた。
「それなら、オレにだってできるじゃないか。
やらせろ」
するとサハラが我に返って、ディオンを睨んだ。

「こ、こら！　邪魔しないでください！」
「オレに向かって、コラとは何だ、コラとは！」
「今、とっても良いところだったんですよっ」
「なんだなんだ、自分たちだけ、ずるいじゃないか」
まったく、ドラゴンのくせに、なんてレベルの低い喧嘩なの…。
「あ～、ちょっと、ちょっと！
揉めてないで、じゃあ3人でやりましょ。ね、ねっ」
バチバチッと視線をぶつけ合う二人の手を
ぐいっと取って、引っ張る。
そして彼らにも手をつないでもらって
円陣を作った。
すると、ふんわり温かい空気に包まれたような
不思議な感覚がして、それがとても心地よかった。
「どうですか、こういうの」
二人も落ち着きを取り戻し
ゆっくりと空間を感じながら深い呼吸をしていた。
「うん、とても穏やかな気分になりますね」
サハラはどこかスッキリしたような表情で

そう言った。

良かった。なんとなく思いつきでやってみたけど
少しは役に立ったみたい。

ところが、ディオンの方へ視線を移すと
彼は眉間に皺を寄せて、目を瞑っていた。

「？　どうした？　ディオン」

サハラの問いかけにも答えず
徐々に額に冷や汗を浮かべ始める。

なんだろう？　苦しそう？

サハラと私は、彼の身に何が起こったのか分からず
手を繋いだまま、ただただその様子を見つめていた。

第13話　進化するドラゴン（1）（後書き）

次話に続きます。

第１４話　進化するドラゴン（２）

「ディオン？」

もともと白い顔を、更に青白くし
苦しそうに瞼を閉じているディオン。

どうしていいか分からず
サハラと二人で、覗き込んでいると
少しして、ふぅーっと大きな息を吐いた。

「すまん。たいしたことはない。
　数日前から、時折こうなるんだ」

なんだろう…？

ただ事ではないその様子に
不安にならずにはいられなかった。

彼は呼吸を整え、碧い瞳を少しだけ開ける。

そして次の瞬間、私の腰が
ものすごい力でかっさらわれた。

気付くと、指が顎を上向かせ
ディオンの綺麗な唇が覆い被さってきていた。

生温かい舌が、口の中を這い回り
貪るように私の中の瘴気を吸い取ろうとする。

その性急な動きに、私は思わず呻き声を上げてしまう。
でも考えてみれば、瘴気はさっき吸い取ってもらったばかりだ。
だからすぐに無くなった。
なのに彼は私の唇を捕らえて離そうとしなかった。
ううっ。これってどういうこと？
無くなったにも関わらず、もっともっとと求めてくる口づけに
胸の奥の別の何かが吸い出されるような気がして
私は怖くなり、ディオンの胸を押した。
すると、彼がハッとして唇を離し
腕に力を入れて私の身体を引きはがした。
「もう休む」
目を反らし、口元を手の甲で拭って
彼はそう言い捨てた。
そして身を翻し、そこを去ろうとする。
しかし次の瞬間、がくりと地面に膝を突いた。
「ディオン！」
私たちが名前を呼んだ先で、苦しそうに胸を押さえ

くぐもった唸り声を上げる。

「…ジュリ、離れていろ！」

その言葉と共に、デイオンの周りに竜巻が起こる。

サハラは私をかばって、後へ下がった。

竜巻の向こうに、ゆらゆらと大きな影が立ち上がる。
それは見上げるほど大きな、銀色のドラゴンの姿だった。

しかし今日はそれだけでは終わらなかった。

苦痛の表情を浮かべるドラゴンの
青みがかった銀色のウロコが、端からすぅっと黒く変色する。
輝いていたドラゴンの背が、見る見る黒い色で覆われていく。

やがてディオンは真っ黒な岩のような姿になってしまった。

その光景に、思考が悪い方向へ流れそうになる。

が、次の瞬間、真っ黒な身体に、ピシリと割れ目が走り
やがて全身を、ひび割れが網の目のように走った。

そしてボロボロ黒い表面は崩れ落ち
その下から輝く銀色のウロコが現れた。

それは今までの数倍の輝きを放ち
まるで宝石で出来た彫像のように美しいドラゴンの姿を形取った。

サハラも、私も、ディオン本人も
呆然とその輝きの中に立っていた。

「これは…」

ディオンは真珠色になった自分の爪を見下ろして呟く。
その爪に意識を集中し、滝の下の水に差し入れる。
すると、パアッ！とそこが同じ真珠色に輝く。
それは、その場所の水が一瞬で浄化された光景だった。

「オレの身体に、水を浄化する力が備わった…」

ディオンが信じられない様子で、言った。
清らかに輝く水は地面に染み出し
ゆっくりと周囲の地面をも浄化し始めていた。

「正確には、水に自浄力を持たせることが
出来るようになった、ということですね」

「そうだな」

私たちは、先ほどの奇跡について
確認し合っていた。

「もともと、水を操る力と、瘴気を吸い取る力は
それぞれ別のものとしてオレの中にあった。
しかし瘴気を吸い取る方は、必要性がなかったために
これまで殆ど使っていなかった。
それがジュリが現れたことで、使うようになり
ここにきて水を操る力と融合することになったのだろう」

脱皮（？）したせいか
ディオンの銀髪はその光を増し
彼の美貌も魔法の粉を降りかけたように
キラキラキラキラ、輝いていた。

ううっ、まぶしいよ。

目を細めて見ると、ディオンは苦い色を
碧い瞳に浮かべた。

「しかしかなり強い魔力だ。
オレが直接浄化したものにエルフが触れたら
刺激が強すぎて、死んでしまうかもしれない」

「えっ！」

私は思わず声を上げた。

死んじゃうの？
だってこの世界を、浄化した方が

生き物のためには良いんじゃないの？
私の表情を読み取って、サハラが説明してくれた。
「私たちは、長い間、瘴気にさらされ過ぎました。
瘴気を一切帯びないものに対する耐性をが無いのです。
もしこの世界の瘴気を完全に一掃してしまったら
恐らく生き残れるのは、ドラゴンだけでしょう」
そんな…
じゃあ、どうすれば？
「やろうと思えば、世界全てを一気に浄化することは可能だが
それはしない。我々の身体を慣らしながら、徐々に、だ。
それでも弱いエルフには耐えきれないかもしれないが…」
「そうですね。中和剤になるようなものを
作ってみましょうか」

そうして彼らの、世界を変えるという計画が
現実に動き出す。
一方でその動きを嫌い、反発したエルフたちが
南の大陸へ渡って行ったという話を耳にしたのは
それから少したってからのことだった。

第１４話　進化するドラゴン（２）（後書き）

総合ＰＶが、１０万アクセスを越えました。お気に入りユーザーにも、たくさん登録して頂き、ありがとうございます。引き続き更新を頑張ります！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7640v/

ドラゴンと私

2011年8月25日20時41分発行